

## 「イタリアの小さな町 暮らしと風景 -地方が元気になるまちづくり-」

### ◆開催要領

日時：2022年1月14日（金）18：30～20：30

会場：(株)竹中工務店 大阪本店 御堂ビル1F

いちようホール（オンライン併用）

参加者：69名（講演者1名、委員会関係者8名含む）

プログラム：

18：30～18：35 開会、講師紹介

18：35～20：00 講演（井口 勝文氏）

20：00～20：25 質疑、意見交換

20：25～20：30 総括、閉会

### ◆開会挨拶

（国際交流委員会 委員長 大庭氏（京都大学））

国際交流委員会は、日本都市計画学会関西支部に設置された委員会で、国際的学術交流活動や学会員間の交流を目的に、例年、セミナーや講演会などの活動を行っている。昨年度は、コロナ禍において、「海外からみたWith/Postコロナ時代の新たなまちづくり・都市計画と仕事」と題し、オンラインセミナーを開催したが、今年度は対面形式で無事開催でき感謝している。

日本では、長い間、地方創生が叫ばれてはいるものの、思うような結果が出ていない。

井口氏はイタリアでの活躍、経験を活かし、真の豊かさは何なのかと実践しておられ、これは現在の日本の活性化のヒントになると思う。

今回の講演が、多くの皆様の貴重な時間になることを祈念してあいさつに代えさせていただきます。

### ◆講演

【講師】

井口 勝文氏

（INOPLAS都市建築デザイン研究所主宰、建築家、博士（工学）、イタリア、メルカテッロ・スル・メタウロ名誉市民）

### 【概要】

#### 1. 何故今イタリアか？

イタリアは私たちの世代では建築、都市デザインの原点だが、最近ではそのような研究の対象にはなっていない。一般的にはスローフードやスローライフなどが有名で陽気な国民性で知られ、観光上注目を浴びることが多い。

一昨年（2020年）の学会誌「都市計画347号」では、イタリアについて、陣内秀信氏の取り組みなどを通じ、「イタリアに学ぶ豊かさ」が特集された。今イタリアに学ぶことと言えばその「豊かさ」のようだ。今日の私の話しもそのことになる。

1960年代、都市や建築のデザインの聖地はイタリアであり、ヒューマンスケールの都市デザイン、街並みなどが建築家や研究者に注目されていた。

当時、日本は都市の時代の幕開けで、都市の建設と再開発が大規模に進み始めた時代だった。戦災復興を終えて新しい時代の都市建設へと移り、容積制、特定街区指定、総合設計制度などの手法が導入された。我が国で都市のモダニズムがようやく本格的に始まった時代だ。これらは大規模開発に繋がり、スーパーブロックや超高層ビルなどの開発を進めてきた。この系譜は現在、都市再生特別地区に受け継がれている。ここでは、イタリアに学ぶヒューマンスケールの都市デザインは影が薄かった。



一方、保存建築や街並み保存、歩行者空間整備などの事業にヒューマンスケールの都市デザインの流れは続いており、それが景観法に繋がっている。

ヨーロッパでは戦後の大きなモダニズムの流れの中、都市の一方的な拡大拡張とその結果である空間の質に限界を感じはじめていた。1960年代後半に先進国の

若者は戦後にもたらされた体制を転換する大きな運動を起こした。70年代に起きたオイルショックがそれに続いて、ヨーロッパは都市のパラダイムを大きく転換した。建築、都市計画において我々は後にそれをポストモダンと呼んだ。ヨーロッパの都市は今、ヒューマンスケールの都市空間を実現している。

一方、'70~'80年代の日本は省資源、省エネで大成功し、経済大国となり、ヨーロッパとは異なるモダンズムの考え方が主流であり続けた。ポストモダンは都市においてはほとんど顧みられず、建築においては形だけのファッションに終わった。イタリアが原点のヒューマンスケールの都市デザインは、日本においては忘れ去られたようにすら思われる。そういう現状で、イタリアの「豊かさ」を考えるのが今日の会である。

## 2. イタリアに何を学ぶか？

「本当の豊かさ」とは何かを先ず自覚する必要がある。都市計画、まちづくりを進めるにはビジョンが必要である。ビジョンを実現するためにまちづくりに取り組む。間違いなのは、最初に問題点を挙げて、その解決のためにまちづくりを行うこと。そうではなく、ビジョンの実現のためにまちづくりがある。

では、ビジョンとはなにか。それは、豊かな暮らしであり、幸福になるということ。建築や都市計画にとって一番大事な部分であるが、おろそかにしている面も否めない。「豊かさとは何か」は研究者の研究テーマにはなりにくい、住民や実務者にとっては避けてはならない、考えるべき根本的な拠り所である。

豊かな暮らしを支える都市計画とはどのようなものか。イタリアの都市計画を日本に持ち込めば豊かになるかといえばそうではない。イタリア人の生活の価値観、豊かな暮らしへのビジョンが彼らの都市計画をつくっている。その逆ではない。

我々はどのような暮らし、ライフスタイルを望んでいるのか、「豊かな暮らし」とは何か、我々の生活の価値観を確かめることから始めなければならない。その時イタリアは多くのことを我々に示唆してくれるはずだ。

## 3. メルカテッロの豊かな暮らし

メルカテッロは Marche 州、Pesaro & Urbino 県にある 50 の基礎自治体(コムーネ)の1つ。面積は 68.6

km<sup>2</sup> で日本の市街化区域に当たる面積は約 83ha。まちはメタウロ川沿いに位置しており、広場を中心に市壁で囲まれた旧市街地があり、その外側に新市街地が広がっている。旧市街はまちなみが保存され、中央広場は教会や文化センター、市役所、メインストリートで構成されている。

このまちの豊かさはなにか。一点目は、美しい風景。日本では美しい風景が豊かな暮らしとして自覚されることは少ないが、イタリアでは風景が豊かな生活の基盤である。市街地と田園、どこに行っても美しい風景で、極めてありふれている。

二点目は食べる楽しみ。おいしい食べ物をみんなで食べる。広場での催しなどを通じてみんなで食事をする。食を通じて自ずからコミュニティが醸成される。

三点目は皆が繋がる場所。コミュニティの場として、道路や広場の占用が認められており、教会もある。日本には少ない、人が繋がる場所が多い。

四点目はコミュニティ。親密なコミュニティにより人が集まり、人が集まるからコミュニティが生まれる。その親密なコミュニティがまちの経済活動や社会活動を支えている。

五点目は福祉と文化。健康で文化的な生活が国によって保障されている。豊かな文化がヨーロッパの豊かさの基本となっており、小さい町でも、文化活動が日常的に行われている。

六点目は地域経済。グローバルな市場経済だけでなく、ローカルに経済が循環する仕組みが根強く維持されている。

## 4. 豊かさを守るメルカテッロ、イタリアの都市政策、都市計画

日本は大都市に多くの人口が集中しているが、イタリアは分散した小都市により構成されている。日本は自治体(市町村)数が明治の市町村制施行時の 15,859 から 1,724 (2020 年) に減少している。イタリアのコムーネは 1860 年国家統一時の 8,000 程度から変わっていない。人口 100 万人以上の都市は 2 つだけ。10~50 万人規模の都市は 4 つ。世界的にも有名なフィレンツェやヴェネツィアなどでも 30 万人~40 万人程度。人口 1 万人規模の都市が多く、1 万人以下の規模のまちに人口の約 33% が住んでいる。日本は 2 % である。人口 1,300 人のメルカテッロの町はイタリアではよく

ある小さな町のひとつである。

イタリアでも行政の効率化が求められて、メルカテッロは他の 10 のコムーネと共にメタウロ川上流域連合自治体(人口合計 43,500 人)を構成し、警察やごみ収集などの一部の行政を共同している。

コムーネは、都市基本計画を定めており、まちの全域が都市計画区域に指定される。中心地の市街化区域(市全域の 1.2%程度)が指定され、周囲は公共緑地などで構成される。その外は一面の田園と山林であり、建築行為は厳しく規制されている。旧市街地には都市基本計画とは別に地区詳細計画がかけられている。これらは全て州が策定する風景計画を尊重・配慮して策定することが義務化されている。コムーネの都市基本計画策定や建築行為の許可は、風景計画に添っているかどうか重要な判断基準となっている。

都市計画の目標は生活クオリティの確保であり、今ある豊かさを守るということに重きを置いている。外的要因によってライフスタイルの変更を迫られることが在るが、それに安易に従うのではなく、今ある豊かさをいかに守るかがベースになっている。

このような都市政策はもともとあったものではない。イタリアも戦後、日本と同じように急速な経済成長によって、工業化が進んだ。人口移動により、都市化が進む一方で、農村は疲弊していった。1950~'60年代、都市の拡大に伴ってドーナツ化現象が進み、中心市街地は衰退した。

1970年代初めまでイタリアの中心市街地は寂れていったが、現在は再生している。1970~1980年代にイタリアは、旧市街地を再生しその周辺に新市街地を構成するという新しい都市政策を進めた。それを実行するために、同時に地方分権も進めてきた。

<1960年代以降の日本の都市政策>

- 1963 建築基準法改正 容積制新設
- 1968 新都市計画法 容積制 開発許可制度
- 1973~ オイルショックを経てハイテク立国へ Japan as No.1
- 1990 バブル~失われた 30 年
- 2002 都市再生特別措置法
- 2004 景観法
- <1960年代以降のイタリアの都市政策>
- 1967 橋渡し法 (Aゾーン指定)

旧市街の保存を義務化

歩行者優先の都市政策へ

- 1972 地方分権実行  
国から州とコムーネへ権限移譲
- 1977 ブカロッシ法  
(新)都市計画法策定の義務化
- 1985 ガラッソ法 風景計画の義務化
- 2000 ヨーロッパ景観条約
- 2001 憲法改正 (地方分権完成)

メルカテッロも人口減少は進んだが(1951年/2919人→1981年/1589人)、中心市街地の人口は微増していた。旧市街は伝統的に、コミュニティと宗教の中心であり、環境が変わっても中心地は栄えていた。

メルカテッロは地方分権が進む 1985年から、新しい町長の活動により、まちが見違えるように蘇った。その後も後継の町長により、着実に取り組みを進めている。

<主たる都市計画の策定>

- 1972 都市建設計画 (Aゾーン)
- 1985 同改定
- 1988、2012 旧市街の地区詳細計画
- 1989 商業計画
- 1991 メルカテッロ憲章
- 1992、2008 P.P.C.地区詳細計画
- 1995、2006 P.R.G.都市基本計画

<主たる事業>

公共上下水道整備 スポーツ公園整備 町営住宅整備  
介護老人保健施設整備 新産業育成 町役場にコンピューター導入 P. Gasparini 改修文化センターへ  
S. Francesco 改修歴史美術館へ ピクニック公園整備  
旧市街建築ファサード整備 Garibaldi 広場舗装改修 夜間照明改良整備 緊急用ヘリポート設置  
中心市街地を歩行者専用へ 公園に憩いのためのバー  
ルを誘致 ベンチベンニ劇場の修復再利用 イタリア  
観光協会オレンジフラッグ獲得 イタリアで一番美しい町協会入会

メルカテッロの豊かな暮らしは小さな町だから可能というものではない。ミラノなど大都市の中心市街地でも、その周辺に開発された新都市でも、豊かさの基本は変わらない。例えばミラノの都心部に隣接して建

設された新都市<3本の塔の街>、その足元ではやはり屋外の親密なコミュニティの場がつくられている。

## 5. 日本とイタリアは全く別の価値観。日本都市計画学会はイタリアに学べるか？

日本とイタリアは全く別の価値観であり、イタリアに学ぶのは難しい。

<価値観の違い 日本／イタリア>

中央集権・大都市集中／地方分権・小都市分散

広域市場経済 重視／地域経済 重視

新しいのが良い／古いのが良い

町の主役は大規模建築／町の主役はオープンスペース

人工環境 志向／自然環境 志向

経済成長 最優先／生活優先の成長管理

大きくまとめて効率向上 志向／小さく分けて独自性

確保 志向

スプロールシティ 志向／コンパクトシティ 志向

都市計画のベースは安全と便利／都市計画のベースは

風景の質

しかし最近大阪天王寺や神戸三ノ宮で、公園や道路占有による屋外が主役の都市空間が現れており、日本もイタリアの価値観、ライフスタイルに学ぶことができるかもしれない。

都市計画学会でも、そういう立場に立って社会に訴える事が必要だ。

- ① オープンスペースを街の主役にすること。
- ② ストック重視、脱スクラップアンドビルド。
- ③ コミュニティの醸成。

これらは今すぐに取り組むことができるはずだ。

一方、「風景計画+都市計画」や、「地方分権」、「地域経済の活性化」は最も重要な課題だが、日本の文化的構造に関わる課題のように思われて、このような場で発言できる言葉を持ち合わせていない。学会で真剣に議論して欲しい。

## ◆質疑・意見交換

### ・後世への継承について

(男性)

日本とイタリアでは価値観が正反対だが、実践して

みたいという部分もある。これをどういう形で次世代につなげばよいか。

(井口氏)

まず、現場を見せること、豊かさの実感をもってもらうことが大事。現地に行くときもツアーのような形ではなく、滞在させると効果的。しかしイタリアと同じような広場をつくれれば日本でもイタリアと同じような広場のライフスタイルが現れるかという、そういうものではない。日本での展開は難しいかもしれない。天王寺や三宮で成功しているのは場所を作ったからではなく、商売として成立するからこそ。そのような成功例があれば日本でも広がっていく。

### ・過疎地の活性化について

(大庭氏)

メルカテッロの人口規模でいうと、日本の過疎地に該当するようなどころかと思う。そういったところではどのように活性化していけばよいか。日本との違いは何か。

(井口氏)

私の考え方だが、郷土愛があるから地方は生き残る。ではなぜそれがイタリアにあるのか。それは、広場があり、それを囲む旧市街、新市街、田園地帯があるという地域構造が基本となっている。そこに美しい風景があり、美しい風景が郷土愛を育てる。「風景が美しいと人は幸せになれる」ということだ。

### ・ストックの活用について

(男性)

ヨーロッパと日本の都市の大きな違いは石造と木造の違いである。石造は未来永劫資産として活用でき、日本と大きく異なる点。その点についてはどう考えればよいか。

(井口氏)

その違いは確かに大きい。でもそれだけでは言い切れない部分や説明しきれない部分もある。ストックを尊ぶ価値観の違いが大きい。ヨーロッパが例えば木造であったとしても、ストックの価値観で木造の街が存在するのではないかと考える。実際にイタリアで修復作業をやってみて実感したことだが、石造は半永久的に残ると思われているが、床と屋根は木造だし放っておくと崩れ落ちて

しまう。石造でも維持にはかなり力を入れている。

会場にお尋ねしたい。

ストック重視社会は可能かどうか。日本では、中古不動産市場の育成が重要。安直な建替えを辞めさせる必要がある。日本人の価値観を変えるのは難しいが、銀行が中古不動産の担保価値を高くするなどの金融政策で中古不動産の市場を活性化するのは有効だ。国会で安倍総理がそんな発言をしているのを聞いて期待したけど、その後誰も忖度しなかった。皆さんどうお考えでしょうか。

(男性)

日本の建設業の構造上の課題がある。ストック重視は必然的であり、早急に対応する必要がある。

昔の田園風景などは、日本の方がイタリアよりもきれいだった。そういったところで経済活動が弱く、過疎化していることが問題。

## ◆閉会挨拶

(国際交流委員会 委員 岡氏 関西大学)

メルカテッロには 2019 年 7 月頃に長期滞在させていただいたことがある。今日の講演にもあったが、日本のまちには中心性がないというのが課題だ。この役割を果たすのは駅だと思っている。

日本にも外で食べたりするところはところどころあるが、おいしいものやおいしいお酒が飲める、しっかりとしたサービスを受けられるという事が重要。EKIZO 神戸三宮はすごいヒントになっている。

コロナ禍が明ければ、ぜひメルカテッロを訪れ、体験いただければと思う。

井口氏の取り組みは素晴らしいが、これには、奥様の力も非常に大きい。お二人には多大な感謝を申し上げます。